vinetur

アルゼンチンのワイン産業、45カ月連続で危機的状況

生産者価格はインフレ率33.4%に対し8%上昇にとどまり、収穫量、輸出、国内消費も減少が続く

2026年11月15日（日）



Coninagro（アルゼンチン全国農業協同組合連合会）が公表した「地域経済信号機」2026年9月版によると、アルゼンチンのワイン産業は45カ月連続で危機的状況にあり、国内の地域農業部門の中で最も深刻な状態が続いている。

同報告書は、ワインとブドウ果汁を再び赤に分類した。Coninagroの分類で赤は、最も厳しい圧力にさらされている産業を示す。ワイン・ブドウ果汁部門は2023年1月以降、赤の状態が続いている。統計系列の対象となる104カ月のうち、ブドウ栽培が赤に分類された期間は73%に上り、報告書が追跡する産業の中で最も高い。次いでコメが67%、乳製品が65%、かんきつ類（甘味種）が64%だった。

Coninagroによると、ワイン産業のサプライチェーンが抱える主な問題は、生産者に支払われる価格の低迷だ。2026年9月の産地平均価格は1リットル当たり331アルゼンチン・ペソで、前年同月比の上昇率はわずか8%にとどまった。同期間のインフレ率33.4%を大きく下回る。一部の生産者は、赤字で操業していると訴えている。

長期的に見ると、購買力の低下はさらに明白だ。報告書によると、実質価格で換算した現在の価格は、5年間の平均である1リットル当たり約721アルゼンチン・ペソを54%下回る。この差は、名目価格が上昇した後も、産地価格がコストやインフレに大きく遅れを取っていることを示している。

生産と消費も落ち込んでいる。Coninagroによると、2026年のブドウ畑の面積は19万6,000ヘクタールだった。直近の収穫量は1,840万キンタルで、前シーズンから8%減少した。需要面では、アルゼンチンの1人当たりワイン消費量は2025年に15.7リットルとなった。2024年比で2%減、年間消費量が1人当たり21.6リットルだった10年前と比べると27%減となる。

貿易統計も低迷の継続を示した。直近12カ月のワイン輸出額は8億9,100万米ドルで、前期比9%減。一方、輸入額は8%増の4,300万米ドルだった。出典は10年間の比較も示し、輸出額が過去の基準を下回っているとしているが、その比較で提示された数値は、報告書の別の箇所に記載された年間輸出総額と完全には一致していなかった。それでも、海外販売が後退しているという傾向は変わらない。穀物関連産業を除くと、ワイン産業は地域経済からの輸出の6%を占めるとConinagroは述べた。

この状況は農業部門にとどまらない。ワインはアルゼンチンを代表する飲料輸出品の一つであり、利益率、生産量、販売の低迷が長引けば、投資や供給に関する判断、国際競争力に影響しかねない。飲料メーカーや輸出業者にとって、産地での収益低下は、海外市場で販売量や価格を維持する力を損なう可能性がある。

報告書の別の指標からは、最終小売価格のうち生産者に届く割合の小ささがうかがえる。2026年9月、生産者が受け取ったワインの店頭価格に占める割合は18%で、過去の平均23%を下回った。出典によると、報告書のグラフでは17%に見える一方、本文には18%と記載されている。いずれの数値も、生産者が最終価格から受け取る割合が従来より小さくなっているという同じ問題を示している。

この指標は11の製品・産業を対象としている。2026年9月には、そのうち9つで生産者の取り分が過去の平均を下回った。地域産品では、ワインとマテ茶が最も大きな乖離を示した。

Coninagroが2026年9月に調査した全産業では、5部門が緑、6部門が黄、8部門が赤に分類された。前月から最も改善したのは園芸で、赤から黄に移った。危機的状況が続くのは、マテ茶、コメ、ワインとブドウ果汁、綿花、牛乳、キャッサバ、林業、かんきつ類（甘味種）だった。